博士論文審査の要旨

本論文のテーマである「視点」の問題は、言語学のみならず様々な分野で論じられてきているが、言語学における視点研究では日本語を対象とする研究が重要な役割を演じている。日本語の視点研究には豊かな研究の蓄積があるが、そうした研究の積み重ねは、視点が関わる多様な言語事象への興味深いアプローチを生み出してきた一方で、分析に用いられる「視点」の概念が論者によってその規定や捉え方が必ずしも一致しないという結果をもたらした。

「視点」の規定や捉え方が曖昧なままに研究が進められてきたという認識に立つ本論文の著者（以下、「著者」）は、本論文の目標を、先行研究で提出されている視点の諸概念を詳しく吟味したうえで、そのなかの「共感度視点」を重点的に考察することにより従来の研究をさらに深めていくという点に置く。分析を深めるために、考察の対象についても共感度視点が大きく関与すると見られる「移動動詞文」、「授与動詞文」、「受動文」の 3 つに絞り込んでいる。

明確な問題意識のもとで、妥当な検討課題が掲げられている本論文は、論文の構成や論述の進め方にも工夫を凝らすことで、全体として、論旨明快で手堅い論文に仕上がっている。テクストレベルの分析の試みや「内の視点」・「外の視点」という概念に依拠する日本語・中国語対照研究の試みなど、開発的な取り組みとしても高く評価されるところである。

以上から、本論文は博士論文に求められる水準に十分到達しているものと判断される。

論文審査結果

日本語の視点研究には Kuroda（1973）、大江（1975）、久野（1978）をはじめとする 1970 年代以降の豊かな研究の蓄積があるが、現在の研究に特に大きな影響を与えているのは久野（1978）の「共感度」の見方と池上（2003、2004）の「事態把握」の見方であろう。本論文は「共感度」を考察の中心に据えつつ、「事態把握」の概念にも必要な注意を払っている。

本論文では、視点の概念を大きく「内の視点」と「外の視点」に分け、さらに後者の「内の視点」に「共感度視点」・「主語項視点」・「基準点視点」の 3 つを認めている。本論文の考察の軸となるのはこのうちの共感度視点であり、共感度視点との関わりでこれまで多大な関心が寄せられてきた移動動詞文・授受動詞文・受動文の 3 つが考察の対象に掲げられている。

このうち、移動動詞文については、先行研究（大江（1975）など）で問題にされていた「話し手のホームベース」という概念を詳細な事例分析を通じてより実質的なものにした点が、また授受動詞文については、「二人称＞三人称」という視点ハイアラーキーが存在することを明らかにした点が注目される。

これらの点に関係して、二人称の位置づけに関する移動動詞文と授受動詞文の違いをめぐって主体の移動の有無といった点をさらに詳しく考察すること、また「談話主題」というときの「談話」とは何を意味するのか、「文主題」と「談話主題」はどのような関係にあるのかといった主題に関わる問題をさらに吟味すること、などを望みたい。

受動文については、日本語と中国語の違いを「内の視点」を好む日本語と「外の視点」を好む中国語という基本的な対立の構図に集約したこと、テクスト分析において視点の問題をテクストの結束性に結びつけて考察したことなどが興味深い点である。視点によるテクストの結束性を本論文では「同一の存在（人や物など）を『視野』に入れた叙述をできるだけ長く続ける」ことと規定しているが、この場合の視点は本論文が想定する視点の種類分けのもとではどの種類に相当するのであろうか。この点についてさらなる検討を求めたい。

日本語と中国語の対照研究について言えば、視点に関する久野や池上の研究が日本語と英語の対照研究を基盤としていることから、本論文が目指している日本語と中国語の対照研究は久野・池上などの研究を相対化するうえで―さらには、視点研究におけるより高い一般性の獲得のために―極めて重要な意義を有する。中国語が外の視点を好むとされているところから、英語との対照研究の試みなどにより研究のさらなる進展を望み得る。

最後に、本論文以後の取り組みのための課題を付記しておきたい。1 つは言語研究における「視点」の概念（概念体系）をより精緻なものにしていくことである。とりわけ、「内の視点」と「外の視点」の関係についてより深い理解が求められよう。もう 1 つは「内の視点」・「外の視点」の観点から本格的な日中対照研究を押し進めていくことである。その際、本論文では考察の対象の外に置かれた基準点視点にも十分留意する必要があろう。著者は時間に関係するものと空間に関係するものを共に基準点視点と見ているようであるが、両者のあいだには同質とは言いがたい差異が存するのではなかろうか。著者の一層の研鑽を望みたい。

最終試験結果【試験実施 2014 年 1 月 28 日】

最終試験には主査を含む 4 名の審査委員全員が出席し、著者による論文の概要説明に続いて、著者とのあいだで質疑応答を行った。審査委員から寄せられた様々な質問・コ

メントに対して著者は丁寧に回答した。これらの質疑応答を通じて著者の意図がより明確になり、また今後取り組むべき課題が具体化されたことは幸いであった。一般参加者からも質問が出され、著者とのあいだで実りある討議がなされたことも、最終試験の意義を一層深めるものであった。

本最終試験では、視点研究に詳しい審査委員が加わったことで、非常に実質的な討議が実現した。また、審査委員に中国語と英語の専門家がいたことで、中国語との対照だけでなく英語との対照も話題になり、広い視野から問題が検討できたことも幸いであった。極めて有意義な最終試験であったことが審査委員によって確認された。